

特別寄稿 オーバードクター12年 ―学位取得から大学入職まで、キャリア形成と教育の実践―

岡本 洋一 熊本大学大学院法曹養成研究科准教授

□ 1 はじめに ―本稿をなぜ書くのか／書かねばならないのか。その個人的／社会的な意味について―

I、本稿は、わたくし・岡本洋一が、大学院博士課程を2002年3月に修了し、学位(博士(法学))を得てから、2014年4月に熊本大学大学院法曹養成研究科(いわゆるロー・スクール)准教授として常勤職を得るまでのいわゆるオーバードクター12年間における教育、研究そしてそこから得られた教訓を記そうとするものである<sup>1</sup>。

本稿執筆のきっかけは、紺屋先生からの勧めによる。たしかに今がその時かもしれない。というのも、こういう機会でもないと、この類の話を発表することもないし、あと数年「大学教員」でいるならば、これらの話が忘却と美化の彼方に至ることは眼に見えているからである<sup>2</sup>。

II、また、このような個人的な執筆動機とともに、より一般的、社会的な執筆の意味も説明すべきであろう。すなわち、匿名でない、顕名による出版(publication)は、思想家アーレントに従えば、その語義から、プライバシーという光を奪われた闇の部分に公(public)という光を当てるもの、公に身を晒すことを意味するからである<sup>3</sup>。

本稿も、ネットのつぶやきでない以上、その社会的意義を説明する義務ないし必要がある。たとえば、この類の話、つまり、大学院を修了または退学し、職にありつくまでの話は、基本的に個人的なものとして話さないのが常であり、いわば不文律のようなものと言える。とはいえ、(この業界の)就職とは、実績×(カケル)人脈×ポストが偶然のタイミングで揃ったときになし得る僥倖そのものと言える。そして、その構造上、個人の意思とは関係なく、誰かを押しつけて職を得ているのであり、その過程への説明責任ぐらゐは(道徳上)あると思われる。また、現在、わたしが経てきたような境遇というものも、程度はあるかもしれないが、けっして珍しいものではなく、むしろ社会的には構造的なものであり、今後も続くものと認識する<sup>4</sup>。

そんな中、ありがちな例として、わたしのような、「ぱっとしない」者がどのような経過で職にありついたかを率直に記すのも一定の社会的な意義があると思われる。世界は「ぱっとしない」凡人たちで溢れているからである。ここに言う研究者として「ぱっとしている」かの基準は以下のとおりとする(大いに異論はある)。すなわち、①一定の経歴の持ち主(学歴、就職までの年数、日本学術振興会特別研究員(学振)採用の有無、科学研究費助成事業(科研費)採択の有無)、②一定の(大学院修了または退学時からの年数以上)論文数(なお、著作は10本と換算。)およびその質(学会誌の掲載、被引用数)、さらには、③日常における言動の場所・時間そしてタイミングの適切さなどである<sup>5</sup>。

<sup>1</sup> 本稿は、矢野秀徳「任期の切れた研究者は、一体何をしているのか」NEWS LETTER 47号(2015年)32頁に触発されている。

<sup>2</sup> 「『センセイ』と呼ばれて、喜ぶバカはなし(五代目柳家小さん)とは、大学教員に向けられるべき言葉と思う。たとえば、「人権」「平等」を唱える大学法学部男性教員らについて宮本有紀「金曜日から」週刊金曜日2011年1月21日831号66頁。極端な例として、2015年9月7日付朝日新聞デジタル「明大法科大学院の教授、教え子に司法試験問題を漏洩か」、同9月10日付「短答式でも漏洩か 教授担当分野、教え子の女性に満点」、同11日付「明大院教授を懲戒免職 司法試験問題を漏洩」。それ以前のものとして松宮孝明「司法制度改革と刑事法」法の科学41号(2010年)59頁の「学問的権威」のない司法試験考査委員による試験漏洩や学生との性的醜聞がある。とはいえ、残念だが実態として「学問的権威」があれば、人格の高潔さが保証されるかは不明である。そもそも近代日本における学問は、学び、教えるという真理探究を通じた人格陶冶をめざす「本来的な学問」から切り離され、貧しい階層から脱出する立身・出世の手段として発展してきた(天野郁夫『大学の誕生(上)』(中公新書、2009年)236頁。竹内洋『立身出世主義—近代日本のロマンと欲望—』(日本放送出版協会、1997年))。「本来的な学問」は加地伸行(全訳注)『論語 増補版』(講談社学術文庫、2009年)、マックス・ウェバー(尾高邦雄訳)『職業としての学問』(原文1919年、岩波文庫、1980年)。

<sup>3</sup> ハンナ・アーレント(志水速雄訳)『人間の条件』(原文1958年、ちくま学芸文庫、1994年)60、75～82頁。

<sup>4</sup> 水月昭道『アカデミア・サバイバル』(中公新書ラクレ、2009年)、同『学歴ワーキング・プア「フリーター生産工場」としての大学院』(光文社新書、2007年)。なお、国立情報学研究所(NII)の論文検索システム、サイニー(<http://ci.nii.ac.jp/>)によれば、「オーバードクター」で43件、「ポストドク」(ポスト・ドクター)なら337件の文献がある(2015年11月1日現在、以下同じ)。

<sup>5</sup> たとえば、紺屋博昭先生である。これは単なるヨイショ(だけ)ではない。ネット検索をすると、①では、旧帝大の博士号取得、学振そして科研費を単独採択と実にスマートかつエレガントな経歴である(科学研究費助成事業データベース<https://kaken.nii.ac.jp/>)。②も上記サイニーによれば掲載数は計44本である。これは、自称・修正サイニー主義者・オカモトには十分尊重に値する。ここにいう「サイニー主義」とは、サイニー掲載数=研究の質の保証とする極端な立場のことである。この「修正」とは、研究内容の質(被引用数、科研採用)確保には、定期的に一定数の論文発表を必要とするとの立場である。たとえば、熊

もちろん、研究者向きの精神構造とは、上記3つの基準を自分に当てはめ、「おお、おれ(わたし)って、ぱつとしているな(わ)」と思える人であろう。とくにこの業界の理不尽さを前に心身の健康を維持しつづけるには、自分の(潜在的な)資質・才能への肯定的ないし過大評価はある程度は必要だと思う(もちろん、日々の蓄積と時々の発表がなければ、それはただの勘違いで終わってしまうのだが)<sup>6</sup>。

ということで、以下、わたしの修行時代と称し、常勤職を得るまでの12年の仕事、研究そしてそこから得た教訓を記す。なお、ここでいう「修行」とは、学問における真理探究を通じて人格陶冶をめざす姿勢を意味する<sup>7</sup>。

なお、本稿では、できるかぎり正確な描写に努めた。とはいえ、上記のような美化と忘却のため、記憶・認識ちがひも多々あろう。関係者のご寛恕を願うものである。

## □ 2 常勤職まで12年、そのキャリア(=人格・能力)形成と教育の実践、そこから得られた教訓

### I 我に職を与えたまえ！ 学位取得者=多額債務者+無職プー博士、職を求む

2002年に大学院博士課程を修了したわたしは、漫画家・西原理恵子の言う無職プー博士(法学)であり(同『できるかな リターンズ』(扶桑社、2000年))、日本育英会(当時)に約600万の奨学金債務(無利子)のある身であった。ゆえに職を探した。すなわち、多くの人のように生活の必要からではない。この12年両親と同居しており、生活の心配はなかった(感謝以外の言葉はない)。その意味で非常に恵まれていた。その代わりではないが、掃除・洗濯・買い物・ゴミ出しそして両親不在時の夕飯ぐらゐの家事はしていた。これは、人の向き不向きもあるだろうが、少なくとも、わたしにとっては精神衛生上も、実際の必要上(現在人生初の一人暮らしに)もよかった。

ともあれ、ネット広告に応募し、面接に訪れた。1つは神奈川県で有名な塾、1つは全国チェーンの個別指導塾であった。が、いずれも不採用となった。その理由を13年後に考えると、いくつか思い当たることがある。まず時期が悪かった(3月で募集はおおむね終了)。また、担当(できる/したい)科目や受験の基本的知識も不足していた(とくに理数系が有利と感じた)。当時は、ほとんど他人と話す機会もなく、今よりもコミュニケーションに難ありと判断されたのであろう。それでも教訓はあった。前者の校舎責任者は、不採用は始めから決めていたのだろうが、「生徒を味方すべし」という長く役に立つアドバイスをくれた(後にそれを痛感・実践することになる)。

### II 塾講師としてデビュー、年齢28にしてお金を稼ぐ厳しさを知る

ようやく見つけたのは、親の家から電車で2時間かかる当時開設したばかりの塾エクセルシア(<http://www.gakushyu-juku.com/>)だった。どんどん入塾がある状態で、これがいかに稀有なことは、後に分かった。とはいえ、

大の前身の一つである旧制五校出身の科学者・寺田寅彦は1933(昭和8)年に述べた。「甲某は何も発表しないがしかしたいようなえらい学者であるというふうなわさはやはり幽霊のようなものである。万人の吟味と批判に堪えうるか堪え得ないかを決する前には、万人の読みうる形を与えなければならないことはもちろんである。」(『寺田寅彦随筆集 第4巻』(岩波文庫、1963年)173頁)。また、学者の責務として定期的に論文を公にし、その「バカぶり」を世間に自ら披露すべしと説くのが内田樹『街場の大学論 ウチダ式教育再生』(角川文庫、2010年)120頁。なお、阿部謹也『学問と「世間」』(岩波新書、2001年)。やはり、この業界の掟は、「公刊か、さもなれば[研究者としての]死か(Publish or Perish)」なのであろう。なお、③については割愛。

<sup>6</sup> 内田(註5)196~199頁。寺田(註5)203~208頁。なお、西原理恵子『この世でいちばん大事な「カネ」の話』(角川文庫、2011年)89頁によれば、「才能」とは仕事を通じて他人に見つけてもらうものとする。けだし至言である。

<sup>7</sup> 武道を通じたものとしてオイデン・ヘルゲル(柴田治三郎訳)『日本の弓術』(原文1936年、岩波文庫、1982年)、内田樹『修業論』(光文社新書、2013年)。なお、金田一春彦・金田一秀徳編『学研現代国語辞典 改訂第5版小型版』(学研教育出版、2012年)654~655頁によれば、現在の用法における修「業」とは、上記・内田『修業論』の趣旨とは異なり、精神的・求道性を排した表記とされ、いわば技術的なものと言える。それゆえ、本稿では学問を通じた人格陶冶をめざす営みを意味する「修行」を用いる。もちろん、これに対しては、石原千秋『教養としての大学受験国語』(ちくま新書、2000年)116頁のように「[大学-岡本]教師は必ずしも人格者ではないし、学問は少しも人格を陶冶などしない。」との考えもある。これは、註2のように近代日本における学問の発展とその実態からは一定程度は理解できなくもない。とはいえ、それを存在意義すら問われている厳しい現状の大学教員の行動規範とすべきかは別である。むしろ、内田博文『刑事政策とNPO』法の科学33号(2003年)74~87頁のように、(刑事法の歴史を)研究し、学ぶことを、自らの人間回復(尊厳)の意味を問い直す営みとする考えに賛同したい。大学を取り巻く非常に厳しい状況については、たとえば、平成26(2014)年8月4日文部科学省・国立大学法人評価委員会の配布「資料2-1 国立大学法人の組織及び業務全般の見直しに関する視点(案)」の「組織の見直しに関する視点」での教員養成系、人文社会科学系の「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」(法科大学院は抜本的見直し)([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/kokuritu/gijiroku/\\_icsFiles/afildfile/2014/08/13/1350876\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/kokuritu/gijiroku/_icsFiles/afildfile/2014/08/13/1350876_02.pdf))。2015年10月21日付毎日新聞電子版「国立大学:33校で文系見直し、9大学で教員養成廃止」。また、『現代思想』2015年11月号の「特集・大学の終焉、人文学の消滅」も参照。このような現状の下、大学の歴史から新たな大学像を提唱し、大学を活字媒体などを通じて知を交換するメディアとして構想するのが、吉見俊哉『大学とは何か』(岩波新書、2011年)17、258頁。本誌NEWS LETTERも、そのような趣旨のものとして理解できよう。

その1年は心身ともに本当にきつかった。わたし以外のすべての先生(塾長と2名のベテラン)は、わたしよりはるかに授業スキルがあり、人気もあった。比較するのも地獄なら、されるのも地獄である。通勤時間も長く、帰宅はいつも午前0時過ぎだった。だいたい月5万程度だったと記憶する。先行きも見えない絶望的な気分で23時30分頃いつも、駅のホームのベンチで座りこんでいたことを思い出す。とはいえ、ここも翌年1月下旬に、塾長からやんわりと退職勧告された。ただ、これも業界の募集時期を考えての配慮ではあった。2014年に熊本大学への在職証明書作成をお願いしに、久しぶりに同社(場所も移動)を訪れると、想像を絶するほど繁昌しており、塾長ご本人も大変お元気で、多忙な日々を送られていた。小額でも、お金を稼ぐ厳しさを叩きこまれた1年だった。

### Ⅲ 学び、教える(株)栄光ゼミナール本厚木校における11年

(1) 退職勧告をされたため、募集がネットにアップされた瞬間に面接を申し込んだ(採用担当者に驚かれた。)。そして採用されたのが(株)栄光ゼミナール(<http://www.eikoh-seminar.com/>)であり、当社の西端に当たる本厚木校に配属された。会社全体は、生徒数、講師数ともに数千人規模だが、本厚木校は150人程度だった。各校には、その規模(つまり、生徒数)に応じて、正社員・室長1名および社員数名(本厚木校は1名)、ならびにアルバイトである事務職2名程度および時間講師が最大10数名はいた。

(2) 授業形態は2つ、集団と個別である。集団とは最大15名程度、個別とは講師1名に生徒2名まで(料金で1対1もあり)、時給は、1~2名が時給1200円、3~5名が1700円、6名以上で2100円程度、昇給は1年に1度10円程度と記憶する。別途業務手当もあり、人数の多寡で、最大400円までだった記憶がある。業務には、保護者との相互連絡・よろず相談、教室出口までの送り迎え(授業開始前後30分間)などがあつた。平均週2~3回で月5万程度であつた。授業対象は小学2年生から高校生までであり、私立中学、公立中高一貫および高校受験がメインである。年間スケジュールは、以下のとおりである。すなわち、1・2月が受験最盛期であり、新学年のための入門講座、春期講座、通常授業、夏期講座(別途夏合宿もあり)、通常授業、冬期講座および受験となる。

(3) ここで学んだのは、限られた時間内で最大限の学習効果をめざす教育方法である。大切なのは、一定の型をつくり、それをルーティンとして守(らせ)ることである。そのために最初の授業が、とても重要となる。生徒に(合格への目的合理的な)ルールを周知し、その厳守を宣言し、言動を一致させる(これが一番難しい)。たとえば、授業時間60分なら、最初の10~15分で板書を用いた説明(内容の要約)、20分程度で演習問題、15分程度で解答説明、10~15分で授業内容の確認テスト(コンピューター入力と復習プリントあり)となる。数年経つと、時間感覚が鋭くなり、時間がなくても、すべきことを時間内に終わらすことができた。保護者への説明もあつた。数か月ごとに保護者会というものがあり、各科目(中学生なら英国数理社)担当から各10分で、受験と授業内容との関連性、子どもたちの現状と課題、改善方法、ご協力をお願いなどをA4一枚で報告し、情報と方針共有を図った。

(4) ただ、やはり、塾とは、(個人の善意とは無関係に)構造的に教育格差を拡大させるもの、特定の社会階層を再生産させるものとの認識はあつた。もちろん、受験が子どもたちの人生のすべてではない。ただ、その後の社会的地位から家族形成まで大きな影響があることは、すでに研究がある<sup>8</sup>。周りの大人の影響も大きい。たとえば、挨拶の習慣と勉強の深(進)度との相関関係である(良い意味で裏切られたことはほとんどない)<sup>9</sup>。とはいえ、挨拶の必要性については、本校をふくむ塾全体で共有されており、全員でしつこく続けていると習慣としてするようになる。ある時間講師が、保護者である自分に挨拶をしないというだけで、その夜に電話で退塾申出があつた。彼自身の指導能力に疑いはない(現在、高校教員をしている)。契約だけで成り立っている世界の厳しさも学んだ。

端的に言って、塾では普通のご家庭から一定程度までの学校に合格させることは、お手伝いできる。とはいえ、いわゆる御三家などトップ校へは非常に困難である(わたしにはその経験がない)。学習習慣・態度は、子どもたちが育った環境に大きく左右されると感じた。たとえば、本棚のある家とゲームしかない家では、子どもたちの学習への意味づけと意欲という出発点がちがうし、保護者の言動の説得力がちがう。塾にも限界はもちろんある。

(5) どの校舎にも独自の雰囲気があり、各学校もそれぞれの雰囲気と理念がある。たとえば、どんな試験問題を出すのかは、各学校が受験生に何を求めているのかを知る貴重な手がかりになる。そして実際に通っている生徒がいれば、その成長の有無からも各学校への評価が分かる。塾講師の離職期間は当時全社で平均3ヶ月と言われたが、本厚木校では1年くらいだったと記憶する。助け合いの雰囲気はあつたと思う。社訓?も覚えた。「元気な人に人は集まる」とは名言だろうと思う。教室には「誰も見捨てない」という雰囲気はあつた。いわゆ

<sup>8</sup> 橋木俊詔・迫田さやか『夫婦格差社会—二極化する結婚のかたち』(中公新書、2013年)65、71、89、95頁の各図を参照。

<sup>9</sup> 荻谷剛彦『学力と階層』(原文2008年、朝日文庫、2012年)48~61頁。

る OJT (On-the-Job Training) もあった。関東一円の各教室の時間講師が集まり研修した。おおむね同じことで悩んでおり、発見も多かった。また自己紹介の大切さ、積極的な姿勢も学んだ。会って3分後に共同作業をする必要があったからである。同僚からもいろいろ学んだ。たとえば、事務のお母さんは、「子どもは、生きていてくれさえすればいい」と言っていた。彼女からは、職階の上下とは関係なく、等しく人に接する大切さも教わった。

教室には独特の雰囲気があり、毎年落下傘のように室長が来てあまり良い変化はなかった。11年で10人前後の室長の下で働いた。部下からすれば、以下のような上司であれば働きやすい。①指示・命令・説明が目的合理的で法則性がある。②感情の起伏が激しくない。③率先して模範となる人、である。ただ、こんな上司は、ほばいない。そういう人は出世していくからである。組織全体から言っても、そういう人物ならば、もっと大きな権限を与えて、より大きな仕事を任せたいと思うであろう。とはいえ、そんな室長たちでも、日々業務はまわ(機能する)から不思議である。それが、組織(の強さ)というものなのであろう。

(6) 当然ながら、心身ともに苛酷な仕事であり、いろんな人が心身を病んでいった。まさに「無事之名馬」、「一に健康、二に才能」の世界である<sup>10</sup>。理由は、食べない、寝ないそして長時間労働＝労働能力と勘違いする体育会系の雰囲気だからだろう(近年は、改善傾向にあるようである)。偶然に知った正社員の給与の安さと、普通の業務における労働時間の長さ、責任の重さとを比較してみて、民間の厳しさを改めて知った。

模擬授業もかなりの頻度で開かれ、「板書も商品」と、ある室長は言っていた。生徒は、書いた板書をそのままをノートに写すので、レイアウトに工夫が必要だった(子どもたちは「字の丁寧さ」「書き順」にウルサイ)。また、生徒個人が勉強すべき、すべての科目全体を俯瞰することを知った。この視点は、自分の科目だけのことを考えると、どうしても視野狭窄になるので、現在もなお大切にしている視点である(8科目に及ぶ司法試験科目について)。

(7) 子どもたちの素朴な疑問～なぜ(この科目を)勉強しなければならないのか～にもできるかぎり答えていた。たしかに面倒な質問ではある。が、教えるとは何か、学ぶとは何かを、根本的に考える良い機会であった。とても難しいが、大切な問いである。その意味において、子どもたちには、とても「鍛えられた」と思う。

#### IV 母校での非常勤講師において 一 多人数講義における課題と時代による変化一

母校・関東学院大学での講義は2003年から担当した(刑法各論、刑事法入門そして法学・憲法)。一コマ平均で多くても250名程度である。講義における課題は、当初は「いかに私語をさせないか」であったが、後にはむしろ「静かすぎる学生をいかに活性化させるか」に変わった。それゆえ、積極的に発問し、答えてもらうことを心掛けた。

また、年々答案が「文章」としての体をなしていない現象が、はじめ工学部で散見され、後に法学部に及んだ。学生の要望もあり、中間テストで書かせる訓練をし、こちらからは、論理的な文章を示し、参考にしてもらった。これは、非常に手間がかかることだが、試験後の採点業務におけるストレス(無力感と怒り)を考えれば、はるかにましである。その背景には、読書量の低下、書く訓練の不足などが考えられる(詳しくは、別稿を期したい)。

#### V 朝鮮大学校政治経済学部法律学科での非常勤講師において 一 「民族とは何か」と考えつつ一

2008年からは朝鮮大学校で刑事法入門、刑法各論そして刑事訴訟法を講義した。朝鮮大学校は、政府の方針から学校教育法(1947(昭和22)年・法律第26号)1条の大学とされていない。したがって、講義も税制上「講演」とされ、通常の大学での税制上の優遇もない。大学校は、在日韓国・朝鮮人社会にとっては、歴史と言葉(ウリ・マル「私たちの言葉」)を取り戻すための運動の中心的なものと言うべきものなのだろう(わたしの講義は日本語だが)<sup>11</sup>。

そこに掲げられている旗・話されている言葉を見聞きするにつれ、民族とは何か―それは言語と歴史(文化)を共有する集団と言え―を改めて認識させられた<sup>12</sup>。大学校は寮制度で、学生たちは集団生活をおくっている。

彼ら/彼女たちは、日本の若者たちとあまり変わらない。それでも、民族教育による強烈な向学心と自負心を持つ彼ら/彼女たちが、現代日本の資本主義における享楽主義を前にして揺れ動く姿は、とても興味深かった。

この季節になると、落ち葉舞う玉川上水浴いの美しい並木とともに、食堂のキムチを想いだす。

<sup>10</sup> 村上春樹(文)安丸水丸(画)『象工場のハッピーエンド』(新潮文庫、1986年)81頁。

<sup>11</sup> 在日韓国・朝鮮人の民族教育の歴史とその必要性については、朴三石『知っていますか 朝鮮学校』(岩波書店、2012年)、他の外国人学校については同『外国人学校』(中公新書、2008年)。ほかに、小熊英二・姜尚中編『在日一世の記憶』(集英社新書、2008年)169頁以下の白宗元(パク・ジョンウォン)の項、別の視点のものとして朴斗鎮『朝鮮総連―その虚像と実像―』(中公新書ラクレ、2008年)もある。

<sup>12</sup> 白川静『常用字解〔第2版〕』(平凡社、2012年)i。また、民族についての刺激的な考察として、小坂井敏晶『増補 民族という虚構』(ちくま学芸文庫、2011年)4頁以下。

□ 3 さいごに —教訓あれこれ、修行は続くよ、いつまでも—

I 教訓あれこれ

最後に、この12年でわたしが得た教訓を、忘備のためにも記す。教育、研究、その他へと続く。

(1) 教育では、できるかぎり学生・生徒の信頼を裏切らない。言動の不一致は致命的である。誤りは躊躇なく認める(すぐに謝る。)。学生・生徒に難しいことは分からない(かもしれない)。とはいえ、教えている人間が信頼できるかぐらひは直観的に分かる。また、これも難しいが「教える側は、絶対に諦めない」。想像できない程の(人間的な)成長を見ることができると、これがまさに教育の醍醐味である<sup>13</sup>。人は学び、変わることができる。

また、「教室の空気」には常にアンテナを張り巡らし、それをコントロールできれば、それに越したことはない。学習に集中できる雰囲気というものには確かにあるし、ある程度作ることはできる。とはいえ、最後は人との関係であり、どうしても「相性」はある。努力しても、できないことはある。また、次の授業準備は、授業終了後に、その反省を踏まえて直ちに行なうようにはしている(精神的にはとてもキツイが)。

(2) 研究では、その日の気分より日々なすべきルーティンを守る。量は質に転化する、「積小為大」(二宮尊徳)、「使う鍬は光る」と信じ、書く(内容は他人の論文・著作の要約と、自分の論文執筆)<sup>14</sup>。とはいえ、心身は日々衰える。30~45分程度しか集中できない。それでも、「書けなくなる」危機感を常にもち、規則正しく生活し、書く。

就職して読書量は半減した。ただ、論文は書けるようにはなった。「インプット(蓄積)からアウトプット(表現)へ」とも言える。さらに変わったのが、ものごとを分析・思考し、そして表現するという研究が、とても愉しく感じられるようになったことである。書くことは楽ではない。それでも以前より、ワクワクするようになった<sup>15</sup>。

(3) 「目立ってナンボ」「批判されてナンボ」は、どの業界も同じだと思う(その意味で、わたしはまったくの無名と言え)。履歴書には、すべて書く。謙譲は、顔の見える者同士で行なうべきことであり、書面審査である公募がそれにふさわしいとは思えない。論文は、翻訳や判例評釈で終わらず、できるかぎり一般論を展開し「論説」(できれば審査付)をめざす。また、本稿もそうだが、できるかぎり検索されやすい題名をつけるようにする。

また、そもそも人事とは不合理なもの達観し、「公募は郵送したら忘れる」。SNSなどで不採用の不满を外部に発信しないことである。たしかに、自分が正当に評価されないことを世間に訴えたい気持ちは、痛いほどよく分かる(わたしも60数校公募に落とされ続けた)。しかし、それは止めた方がいい。「公募は出したら忘れる」。これが精神衛生上も宜しい。そして就職して初めて実感するのは、業界の驚くほどの「狭さ」である<sup>16</sup>。

(4) 「狭さ」と言えば、不安定な職にあると、構造的に視野は狭くなる(わたしの能力・資質の問題かもしれない)。それは、就職して初めて指摘された。「構造的に」とは、個人的な意思と能力とは無関係に、経済的および社会的な不安定な地位に置かれると、身体的・精神的に身近で矮小な世界しか視線が届かなくなるということである。それは、触れられる情報量の多寡・浅さ深さ、そして生活から精神までの余裕の有無にも由来するのであろう。

また、わたしに勇気がなく、不安定な地位が理由からだろうか、よく「膝を屈した」し、その屈辱にも馴らされた(今はその反動期にあるのだろう)。論文の副題が「慣例」でないという理由で校正後(?)に変更を「お願い」され、掲載拒否が怖くて「承諾」した。兄弟子のアドバイスは「文書による正式な要請を求めよ。」だった<sup>17</sup>。

(5) 信頼できる人の助言に耳を傾け、直せることは直す(最近、とある刑事事件の証言に、改めて我が意を得た)。また、自分の失敗のパターンを見つけ、回避する工夫をする(個人的な標語は、「順番→準備→確認→工夫」、である)。

<sup>13</sup> 内田樹『ぼくの住まい論』(新潮社文庫、2012年)176~177頁。西原理恵子『サイバラ茸7』(講談社、2007年)137頁。

<sup>14</sup> 日々書(拙)くこと大切さについては、寺田(註5)62、86~88頁、村上春樹『走ることに語るときに僕の語ること』(文春文庫、2010年)69、251~252頁、同『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』(文春文庫、2012年)178、439頁、東村アキコ『かくかくしかじか1~5』(集英社、2012~2015年)。具体的に、「たくさん」書くためのスキルについては、ポール・J・シルヴィア[高橋さきの訳]『できる研究者の論文生産術 どうすれば「たくさん」書けるのか』(原文2007年、講談社、2015年)。

<sup>15</sup> 『論語』(註2)135頁の雍也第六、子曰く、之を知る者、之を好む者に如かず、之を好む者、之を楽しむ者に如かず。さらに、益川敏英『学問楽しくなくちゃ』(新日本出版社、2009年)。

<sup>16</sup> 『論語』(註2)17、89頁で繰り返し、他人に認められないことを嘆くべきでないと言くのは人生戦略の一種なのだろう。同旨・内田樹『ひとりでは生きられないのも芸のうち』(文春文庫、2011年)31~32頁。なお、あの孔子ですら、不細工な弟子を「無能」とし、後に反省した(『論語』(註2)132頁註3)。「人を知る」難しさである。ちなみに、わたしは自分の新任歓迎会でかつて別の公募でわたしを不採用にした人間から、その理由を拝聴する珍事(破廉恥とも言う。)に遭った。業界の狭さを示す好例である。

<sup>17</sup> 最決平成18(2006)・1・17刑集60巻1号29頁を契機とした「建造物『損壊』をめぐる一考察—公園トイレ『反戦』吹きつけ事件を題材に—」『関東学院法学』16巻3・4号(2007年)205頁以下のことである。しかも「お願い」はケチをつけた本人からのものではなかった。自分は安全地帯にいて、(地位が低く、弱い)人間を論難する。註7で石原が指摘したような典型的な人物と言える。なお、次元はまったく違うが、益川敏英『科学者は戦争で何をしたか』(集英社新書、2015年)13~14頁にも似た話がある。

## II 修行は続くよ、いつまでも

いま振り返っての感想は、「12年、よく続いたな」である。とはいえ、それは結果であり、毎日精一杯だった。何時でも辞められた。だから辞めなかった。「就職なんてできっこない」と幾度か言われた。自分の能力を考えれば理解もできたが、辞めるつもりもなかった。どうせ一度きりの人生である。「諦めるなんて、死ぬまでないから」(The Blue Hearts)。幸か不幸か、「責任」を取るべき人もいなかった。両親との同居だったので、生活の心配もなかった。家族・恩師・友人・同僚そして教え子たちには、本当に恵まれ続けたし、感謝以外の言葉はない。苦しいときにご恵贈いただいた抜き刷りが、どれほど励みになっただろう。それを忘れてはいけないと今思う。

そして、何よりも、自分が学び、人に教え、伝えることが好きなのだ。もう一度この12年間を繰り返したいかと言えば、おそらく否である。が、それもまた人生(美空ひばり『河の流れのように』)なのだろう。

もし、読者に研究者をめざしたいという人がいるなら、次の2点をぜひ強調したい。すなわち、①相当の覚悟と日々の努力は最低の条件である。なのに、②それは、貴君の将来をまったく保証しない、それでもいいか、である。たしかに、賢い選択ではないのだろう。でも、その勇気に心から敬意を表したい。幸運は勇者に微笑む。一度の人生悔いの(少)ないように、と。よく考えると、すべての職業人に当てはまることなのかもしれない。

最後に、本稿執筆の機会を与えていただいた「旅する研究者」紺屋先生に深く感謝する。もちろん、「わたしの修業時代」に終わりはない。というわけで、修行は続くよ、いつまでも、というのが、本稿(そして、わたしの研究者人生)のオチということになる。



おかもと よういち 1972年神奈川県生まれ、私立東海大学附属本田記念幼稚園卒園、神奈川県と静岡県の市立小学校を4回転校。私立桜美林中学、同高校を経て、私立関東学院大学法学部卒業、同大学院法学研究科修了、博士(法学)。年少より水泳、野球、ラグビーそして合気道に触れ、「人生、努力と根性」を信条とする。礼儀を重んじつつも、その相手を吟味したがる凡そ世間向きでない性格。現在、クマモト生活と常勤職を満喫しつつ、近代日本・ドイツにおける団体・結社に対する刑事法的規制とその問題をめぐる著作を鋭意準備中。趣味は研究と教育(つまり、世間的には無趣味)。